

高校教師のライフヒストリー研究 (1)

中年期後の男性教師の聞き取りから

塚 田 守

Life Histories of High School Teachers (1):
Interviews with Male High School Teachers of Mid-life

Mamoru TSUKADA

1 はじめに

本小論は、高校教師のライフヒストリーの聞き取りに基づき、高校教師の「教師としての生き方」のタイプとその形成過程を分析することを目的とする。

聞き取り調査としては、現在18名について行ったが、この小論文では、紙面上の制約もあり2名に限定する。下記の仮説的類型の2つのタイプに限定し、「管理職志向」と「組合活動志向」の分かれ道に焦点を当て、2人のライフヒストリーの概略を論じる。ライフヒストリー研究においては、「口述」に基づいた「厚い記述」が本来のあるべき姿であり、聞き取り相手の「生の声」を生かして、それぞれの「語り」を分析するやり方が研究対象者の「解釈枠組み」を描写するのにより適していると考えられるが、それは別なレポートとしてまとめる予定である¹⁾。

分析対象としてこの2名を選んだのは以下の理由による。人々は時代の影響下で生きているので、同じコーホートに限定することにより、その時代の影響を一定にしたいと考えた。次に、2人の対象者は男性である。女性教師のライフヒストリーは男性のものとは異なるので、これは別な問題として扱う必要がある。第三点として、分析対象者は公立学校の現役校長と教師である。県の人事異動によって、教師のキャリアタイプが影響される可能性があるからである。

2 教師のライフヒストリーとライフコース研究をめぐって

『教育社会学研究』(1990)では教育研究に対してライフコースのアプローチの有効性が認識され、その研究の可能性についての特集が組まれた。その中で、門脇(1990:19-20)は、ライフコース研究の6つの共通項目として、1)個人の生活の軌跡に主たる視点があること、2)個々人の生涯を歴史的な事件や時代の特性との関連で説明しようとしていること、3)個々の人の生活の軌跡への関心と同時代人(コーホート)としての共通性に注目すること、4)年齢規範とそれに伴う役割への適応過程を分析すること、5)個人特有の体験や事故・出来事との遭遇に関心を寄せること、6)個人の解釈や意味づけに注目し

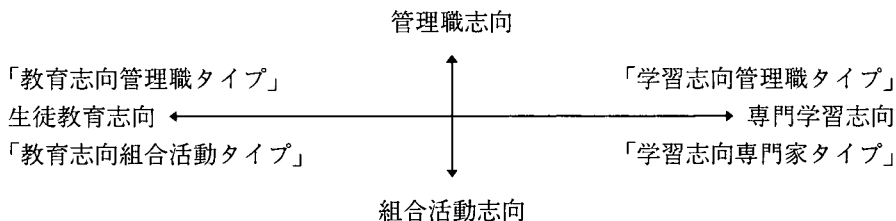
ていること、とまとめている。また、山崎は（1993：179－192）は、同様のライフコース研究の枠組みで、インタビュー調査およびアンケート調査に基づき「教師の力量形成」の研究を行い、個人的時間、社会的時間、および歴史的時間の相互作用の重要性について論じた。さらに、力量形成上の転機が重要であり、その分析が教師のダイナミックな力量形成の理解につながると論じている。山崎は、教師の教育実践は、授業、学校、地域という三重の場であり、その中での力量形成の契機は各ライフステージごとに異なるとして、6つのステージに分け、一人の教師のライフコース研究の試みた。本研究は、このようなライフコース研究から学び、分析枠組みとして以下のことを考慮し、男性の高校教師のライフヒストリー研究の試みを行った。1）同時代、ほぼ同年齢、同性、同地域（同じ県の公立高校）の2人を選び、それぞれの影響を一定にしようとした。2）「力量形成」の研究は「直線的に発達する」教師経験に注目しているが、本研究では、ある特定のタイプの教師になってゆくプロセスに焦点を当てた。3）異なった2つのタイプの教師のライフヒストリーを比較し、その「分かれ道」になった要因に注目した。

3 研究の方法と仮説的類型モデル

聞き取り調査は、それぞれ、校長室と保健室で行われ、すべてテープレコーダーでの録音の承諾を得て、録音した。それぞれ約5時間ぐらいの聞き取りであった。その間、他の人からの中断はなかった。聞き取り調査では、予め質問事項を準備するのではなく、それぞれの調査対象者に、教師体験を中心に「語ってもらう」形式を取った。「なぜ、教師になったのか、そして、その後、どのような教師体験をしてきたのか」を尋ねた。調査を進めるに従い、話題になる問題について、その後の教師達には同じ質問をした。

18名の聞き取り調査の分析に基づき、仮説的に教師のタイプを4つに分けた。その分類の一つの基軸としての「組合活動志向」と「管理職志向」との対立関係が、「教師の生き方」の要因として働くと考えられた。さらに、2つ目の基軸として、「生徒教育志向」なのか、自己の「専門学習志向」なのかで、対立関係があるのではないかと考えられた。今回の2人の教師がそれぞれ、「教育志向管理職タイプ」と「教育志向組合活動タイプ」を質的に代表しているのではないかという前提に立ち、それぞれのケースを例証的に論じる。仮説的類型モデルとしては以下になる。

【理論枠組み】



この仮説的モデルは、「教師としての生き方」の全体的把握の位置付けとして図式化したものである。

4 2人の高校教師のライフコースの事例

1 「教育志向管理職タイプ」Aさんの事例

Aさんの経歴と「重要なできごと」の流れ

- 1936年 田舎の旧家に生まれる。
- 高校時代 牧歌的な高校生活
- 高校3年 結核と診断され、休養生活が要求された。
山村か漁村の「田舎教師」を目指す。
- 19歳 教育大学に入学
「社研」クラブに入り、政治思想の読書と研究
自治会のリーダーとして、渉外局長として
- 21歳 専門科目の数学を本格的に勉強
- 22歳－28歳 伝統高校に勤務
理論派教師として、先輩教師を論破する。
安保関係のデモは皆出席
熱心な個人的受験指導
- 28歳－36歳 名門高校に勤務
組合の上層部への不信感
「できる生徒」を教える喜びを味わう。「生徒から拍手のどる」授業
- 36歳－46歳 同じ学校群の高校に転勤
教務主任として、PTAの対策に熱中
「名古屋大学の合格数」をあげる体制の構築に努力
「実力ある校長」の赴任とアメリカ海外研修
学校運営の面白さを味わう。
- 47歳－52歳 市内の名門高校へ教頭として、前任高校の校長だった「実力のある校長」に
呼ばれ赴任
年配の組合教師の対策と学校運営に手腕を発揮
- 53歳－現在 新任時代の勤務先に校長として赴任
「崩れる生徒」の指導できる教育をめざして
「百貨店」高校を目指す：国際交流を促進、学校行事の充実、他の高校との
連携

愛知県公立高校の数は163校に過ぎない。全教職員の数を考慮すると平均的教師が必ずしも管理職になっていくわけではない。校長になるには校長になるだけのプロセスがある。

Aさんは、「校長の中の校長」という印象を受けた人物であった。笑顔を絶やさず話す姿に余裕を感じた。「口うるさい」評判を持つ学校の眼科医に対する対応もまさにそうで、静かに、しかも、きちんと対応する姿に、理想としての校長の姿を見たように思えた。

校長になること、管理職をめざす人物というのは、野心的で、他人を蹴落としてでも「出世したい人物」「ごまをする人物」「権力志向の人物」というコメントが多かった。さらに、管理職になるための「登竜門」として、県教育委員会への出向が不可欠であり、卒業大学

の「学閥」が重要であるという意見も多かった。しかし、Aさんの場合はそのようなものは当てはまらなかった。Aさんは、「校長をめざした」わけではない。抜擢されて「管理職への道」をごく自然に進んで行ったに過ぎないようである。「力をもった校長」との出会いはその意味では重要であるかも知れない。「校長のなかの校長」と思われたAさんがいかに校長になっていったか。その鍵はAさんの「チャレンジ精神」「リーダー・シップ」「進学指導実績」そして「偶然的出会い」であった。

教師になるまで：「病弱な」生徒として「田舎教師」をめざして

病弱だったAさんは、「田舎教師」が将来の天職だと周りから言われていた。高校3年生の時に結核と診断され、まず、身体を大切にすることを考えた。体育の時間は見学するだけの生活をしながら、父母、祖父母たちは、空気の良い漁村に行って、公務員か教師をやるのがいいとアドバイスをしていた。自分の身体に自信がなかったので、その方向で将来を考えていた。映画の『二十四の瞳』あるいは、『次郎物語』の先生のイメージがあり、自分も将来、田舎で「良い教師」をしようと思い、教育大学を受験した。その意味では、この時代のコーホートの典型的教師タイプであった（山崎 1993：227）。

田舎から大学に進学したAさんは、大学のクラブの勧誘のなかで最も輝いて見えた「社研（社会科学研究会）」に入り、『空想から科学へ』や『共産党宣言』などを読み、社会について論じる学生に変貌してゆく。その時、故郷の父母、祖父母が馬鹿に見え、活動家の大学院生など、政治について語る人々に憧れていた。そして「こんな世界」があったことに驚き、社会や政治に関心を持ち活動した。その研究会の中では、優等生で大学の自治会に参加し、渉外局長に任命された。その渉外局長に任命されたことにより、東京の全国教員養成大学連絡会議などにも参加し、名古屋大学グループにも参加していった。1-2年生は、その活動で全て過ぎた。その当時を思い出すと、「あれは、あれで面白い」経験であったと言う。しかし、教養部の単位は簡単にとれたので問題がなかったが、3年生になると、専攻科目である数学が難しくなった。さらに、キャンパスが他地区に移ったので、結果的には、自治会活動をやめることになった。

夜間高校出身で3歳上の人と出会い、その先輩と2人で住み、数学の勉強を狂ったようにやったと言う。ゼミの授業には熱心に参加して、卒論のゼミに夢中であった。「小中の教員試験だったら自治会メンバーであっても落ちない」という噂があったり、すでに、「面がわれていた」者は私立学校を受験することを決めていた。さらに、中学校の時の恩師が、「中学校だったら、指導してやるから来い」と言われたにも関わらず、結局、高校教員試験を受験し、高校の教師になった。

新任教師時代：組合の活動家、「熱血教師」として（22歳から28歳）

赴任先は伝統のあるB高校であった。学生時代の政治活動のせいであろうか、先輩教師たちを馬鹿にしていた。先輩の教師たちを「封建的だ」と考え反発をするのは、Aさんだけでなかった。新任の教師が5人いたが、それぞれが、「自分の立場で行動するし、校長先生にも文句を言い、論破してしまう」者ばかりであった。当時の学校を取り巻く政治状況がAさんの教師生活の特徴付けた。60年代安保の時代であり、ほとんどの教師が組合に入る時代であった。Aさんも組合の分会に入り、安保関係デモには皆出席であった。

Aさんは、2年目から担任を5年間続けてやった。担任をやりながら、「チンピラ」のような生徒などは、力で押さえ、「進学したい子などには補習をする」というように、「鼻ばしらが強くて何でもやった。」いかに当時学校に反発し行動をしたかの1つのエピソード。タバコを吸い、ゆすりたかりをする生徒たちを修学旅行に連れて行かないと学校決定がなされたが、Aさんは、「夜、その生徒と自分の手を縛って寝るから…責任を持つから…」とその決定を覆した。実際には、生徒に目を盗まれ、ベテランの教師たちがそれを押さえ、立場がなかったという。若い教師が主導権を持った時代であった。

B高校では、学校の予備校化につながるということで、学校としては、補習をやっていた。しかし、若い教師として、「俺が面倒みてやる」と言って、個人的に4～5名の生徒達にたいして、独自に早朝あるいは、日曜日に補習をやった。制度としての補習でなかったため、組合からは何の反発もなかった。Aさんは、個人レベルで受験指導に熱心で、面倒みのよい「熱血教師」であった。

名門高校への赴任：組合への「不信事件」後、受験のプロ教師として（28歳－36歳まで）

第2の赴任先は、名門高校であったC高校であったが、Aさんは組合活動を活発に行っており、2年目には学校委員（学校レベルの組合役員）を2年間やった。その組合運営で、組合組織に不信感を持つ事件が起こる。その地区から支部役員を選出するようにという依頼があったが、無理ということで、その年は見合わせるということに決定した。しかし、結果的には、その委員会決定を無視して、その支部役員を支持政党の組織が決めていた。そのことに対して、Aさんは、激怒すると同時に、組合とその政党に対して不信感を持った。一般の学校委員を外してものごとを決定してゆく党のやり方に怒りを覚えたのであった。建前上は、学校委員の中で様々な議論を積み重ねて行って結論を出す、となっているが、実際は、「前衛」グループが存在しており、そのグループが重要な決定を行っている。そして、利用価値がある時だけ、組合員を利用するという2重構造があると考えたAさんは、組合に「嫌気」がさした。

赴任先の名門C高校は、尾張地区の秀才ばかりが集まる場所で、「できる生徒相手の授業は面白い」と思った。入試問題を解く時、予め、もっと簡単に解くための定理を教えておいて、実際に解く時に、「別解」を提示する。一般的な模範解答の3分の1くらいの労力で入試問題を解くAさんに、生徒たちは、「拍手をする」ほどであった。生徒によって尊敬されたことは、教師冥利につきるものであり、授業に熱中する毎日であり、受験にも熱心であった。

管理職へのプロローグ：管理職としての基礎作りと受験実績（36歳から46歳まで）

愛知県の高校改革である学校群制度²⁾の導入された時に、Aさんは、名門C高校と群を組んだD高校の人事交流の転勤第1号として、D高校へ転勤した。なぜ、D高校に転勤になったのかの真実は分からないが、Aさんは、3つ可能性があると言明する。一つは、組合活動のせいでC高校には、「危険な」存在だったから、転勤させられた。2つ目の理由としては、C高校に8年も勤めたので転勤する時期の「適齢期」であった。3つ目の理由としては、D校校長が「引っぱった」というものである。世間的には、名門C高校からD高校への転勤は否定的に捉えられるが、Aさんにとっては、「管理職へのプロローグ」と

なる。

D高校でのAさんの役割は、D高校のPTA対策であった。学校群制度は、高校格差の是正を目的として、地域で「群」を作り、その群内の学校での学力の平等化をめざし、生徒本人の意志に関係なく、生徒を振り分けるというものであった。しかし、その政策的意図に反して、さまざまな混乱を起こさせた。D高校のPTAは「改革運動」を起こし、1)教科書をC高校と同じものを使うこと、2)カリキュラムもほぼ同じにすること、3)修学旅行も同じところ行くこと、4)卒業証書を同じ様を書くこと、証書の下に、「C学校群」と記入する、などの具体的な要望が出された。そこには、伝統のあるC高校に自分の子供達を入学させられなかったD高校の父兄達の、やり場のない不満があったようだ。教育行政的には、学力による学校間格差は正であったが、地域に根差した名門C高校の名声と威信は、父兄達には重要であった。C高校で8年間教鞭とってきた唯一の教師であるAさんだから、D高校のPTAを説得する役割が任せられたのであった。

若干36歳のAさんが、教務主任をやり、PTA対策を一気に引き受ける形になった。不信感の強まっていた組合を翌年9月には正式に脱退し、教務主任、進路主任、指導部長と学校内での重要な役割を担っていった。C高校と対抗して、名古屋大学にどれだけ入れるか、ということが、進路主任としてのAさんの課題であった。実際に、D高校は、5年目には、名古屋大学合格者の人数で、C高校に「勝つ」という成果を上げた。その理由は、Aさんによれば簡単な事であったと説明する。学校群制度で、D校にやってきた生徒を、「とってもいい子が来た」とD高校の教師達は歓迎し、補習などを行い生徒達を受験の面で鍛えようとした。それに対して、C高校の教師たちは、C高校にやって来た生徒達を、「馬鹿が来た」「本来なら、C高校に入れない子が入っている」などと、半数の生徒たちを否定的に見て授業をする結果になった。この生徒たちへの教師の「まなざし」やD高校のC高校への対抗意識が、D高校を「勝利」に導いた、とAさんは言う。

教務主任などを歴任していく過程で、全校生徒に早朝補習、3年生に対しては7限と早朝補習を行った。D高校でも入試問題をうまく解くと拍手が出るほどの教師としての実力を見せながら、授業をやった。その授業のやり方は、まず、教科書を押さえておいて、それよりレベルの高い定理などをあらかじめ教えておいて、その定理を使ってうまく解き、「受け」を狙った。その時に高度な定理の証明まで深く入るのではなく、その使い方のみを教える、まさに、受験用の数学を教え、その教えることに生きがいを見出していたようであった。受験のプロとしてC高校で鍛えたAさんの能力が発揮された。

Aさんは進路部長だった時夏休み中の補習を行ったが、能力編成のクラスを作り、より効果的な受験勉強のやり方を採用した。しかし、そうすることによって、より多くの教師たちに参加を求めなければいけなかった。夏休み中は、家族で日本海側の民宿へ避暑家族旅行をするのが習慣であったが、その期間の補習も人一倍引き受け、毎日、5時間、120キロを何日も通ったと言う。毎朝5時に民宿を出て補習に向い、午後3時頃に夕陽を見ながら民宿まで自動車を飛ばす車中「最高の喜びと充実感」を味わったと言う。その熱心な進路部長の態度に他の教師たちは協力せざる得なかったことであろう。

進学高校における問題は、「熱心派」の内部抗争の調整である。どれだけの時間をどの科目に配分するかの問題があったと言う。その協力体制の確立をどのようにするかが、進路指導部長の役割であった。なぜ、若い教師たちが、それほどまでに受験に熱心になれる

かを尋ねてみた。Aさんによれば、基本的には「受験は面白い」からであると言う。部活の楽しさと同じ感覚であると言う。ある程度生徒が自分になつて、一生懸命になると、外部模試でも成果が上がる。その成果が上がるのが生徒も喜び教師も楽しいのである。さらに、学校の名誉というものが次にある。その中で、受験指導体制でやっていくことの気運は、学校全体を高め競争力として働くのであった。このように、Aさんは受験の「面白さ」を味わい、学校運営の基礎を培った。

D高校に「有力校長」が赴任してきた偶然がAさんの「管理職への道」を促すきっかけとなった。その校長は海外留学経験を持つ校長で、県の短期海外研修がD高校から長い間出ていないことを問題として、県教育委員会に異議を申し立て、そのポジションをとってきた。当時の教頭の推薦で、Aさんが年齢的（当時、42歳）にも適当だとして、願書を出した。Aさんは3年間は待つつもりであったが、結果的には、選ばれアメリカ海外研修25日間を経験することになる。アメリカで学校視察を含む研修で、「日本式の根回し」による「悪き民主的」学校経営でない委員会制を徹底したアメリカ式学校経営を視察し、その効率性に感動して帰国した。アメリカの学校では、立案者が原案を説明し、実施計画の細部に渡って指示を出す。他の教師たちは、それに関連した具体的なことについては質問するが、それ以外のことは議論をせず、実際、その立案計画に従って実行された。一つの学校行事が一週間前の20分ほどの議論で決まってしまう、実行されたことに感動したのであった。しかも、そのすべての責任は、その立案の委員会あるいは担当者が負うというものであった。日本では、そのような学校行事を行なうためには、さまざまな「根回し」を重ね、さらに、教職員全員の「ああでもない、こうでもない」という議論を延々と続けなければならなかった。しかも、それが「民主的な職場」であり、結果的には「責任は、だれも取らない」という形式のものであった。その当時、アメリカ式の方が「精神的に高い」と感じ、「精神の高ぶる日々」が半年ぐらい続いたと言う。

海外研修、学校外の研究会活動によって、自分の授業への生徒たちの賛美の拍手よりも、学校を運営していく実感の喜びの方が、この時を境に、Aさんには重要になっていった。この時期から「管理職への道」を着実に歩むことになる。アメリカ研修旅行に行った12名のうち一人を除いて、現在までに、すべて校長になり、年に1回は会合を持っているというネットワークなどが、重要になった。研修に選ばれる段階で「管理職への道」が決まっているという見方もあるが、この研修での経験が、Aさんをさらに、管理職へ向かわせたのであった。

教頭時代：管理職として「組合教師」への学校運営の実績（47歳から52歳まで）

D高校の校長だったEさんが、名古屋市内の名門F高校に移り、その校長最後の一年の時に、Aさんを教頭として呼んだ。F高校の教師たちは、新鋭進学校のD高校とは異なった文化を持っていた。「組合の付属高校」のようなところがあり、「教職員は、労働過重であるので、その労働を軽減しなければいけない」と考えている教師が多かった。また、生徒の自主性は尊重しなければいけないとして、生徒に対して何もしない文化があった。ただし、教師達は、「ほろをださない」人が多く、授業の50分はきっちりやる人が多かった。

このような学校文化では、補習はやってはいたが、熱心ではなかった。組合の教師たちの中には、「手当をもらわないなら」「生徒がかわいいので」やるという教師がいたが、個

人的都合により休講することも多かった。さらに、市内には、有名予備校があり、生徒達は、その予備校の高校生コースと夏休みの補習両方を取る傾向があった。特に、受験の主要科目の数学と英語は、その有名予備校へ行く傾向があった。社会と理科に関しては、進度の関係上、補習を受ける生徒も多かった。勉強のレベルは質的には悪くない生徒が多かったので、学校側がそれ程努力をしなくても、それそう応の大学進学の実績を上げていた。

そのような文化に一石を投じようとしたのが、校長のEさんであった。県の就業規則によれば、修学旅行の翌日は生徒には代休措置はない、として、生徒に登校してくるようにした。そのことへの対策が全て教頭であるAさんに一任されたのであった。Aさんは、親しい教師たちに「肩をたたいて」協力を依頼したが、それを「第2組合の結成」だと称され、組合との間に対立が生じた。どうにか、一部の教師たちの協力で、無事に終える事ができた。F高校の教師の平均年齢は48歳で、50歳代が半数いた。なぜそのような年齢構成になるのか、Aさんの説明では、自分の地域に帰りたいという気持ちが始まりであったのではないかと、また、F高校の持つ名誉に惹かれてやってくる人が多かったのではないかと。しかし、それよりも重要なことは、組合員の転勤先として、「苦情をださない学校」としての機能を果たした結果ではないかと、言う。生徒の学力の面、生活指導面でも楽な学校であるから、中年期をすぎた教師たちの「楽園」なのである。このような「組合の付属学校」のような学校で教頭としての役割を果たし、新任時代のB高校に校長として赴任した。

校長時代：「くずれた生徒」を含む学校経営（53歳から59歳まで）

現在の校長としての仕事は、「権力を施行するのではなく調整役である」と言う。校長として独自の予算を持っているわけでもない。持っているように見えても、実際は、PTAの予算を管理している程度である。学校内人事も基本的には自然に決まってしまうのが現状である。校長は、学校の中で特別な存在としてあるので、仕事をやっている教師に対してアプローチし、その仕事を評価し、サポートする役割は重要だと言う。校長に「誉められること」は、重要な意味を持つからであると言う。

教職員人事についても、特別な場合を除いて校長は役割を果たさない。たとえば、尾西北地区に1500名の教員がいるが、その地区を教職員課の一人の管理主事が全部担当する。実際の人事異動の時には、一つの学校の事情を考慮するというよりも、県全体のことを考える。その時に、「荒れる学校」として、新聞紙上で問題になる学校についてはそれなりの対処をする。さらに、県全体で、国公立大学受験の合格者数などに課題がある時には、それなりの対処をする。しかし、実際「土俵ぎわでがんばっている学校」には、手を差し伸べず、「土俵を割った学校」に後手後手の対処をしているというのが現状である、とAさんは説明する。

B高校は、創立86年目になる伝統高校である。国立に一人ぐらい合格し、3分の1が4年制大学に、3分の1が短大に、そして、残りの3分の1が就職や専門学校に行く。この学校で問題となっているのは、一部の生徒の生活文化が教師達の生活文化と合わない、ということであると言う。教師たちは、本音では、「嫌な子供達」と思い、その生徒達から見ると、「あの先公たちはイヤ…」という事になる。校長として、この存在が一番気になるという。この生徒達を指導してゆくためには、補習や追試では十分でなく、たとえ「管理主義教育」と呼ばれても「マナー」で絞める以外に方法はないと考えている。現在の教

師の権威失墜と「管理主義教育の批判」が文化摩擦を顕在化し問題を拡大する原因になっていると言う。例えば、校則問題で言えば、緩くすること自体に賛同しても、その後予想される結果についての具体的対策が教育界にない。「くずれた生徒たち」を指導するノウハウを持たないのが現在の学校であると言う。以前は、馬鹿気たこととは知りながら、一律でくずさない指導をやっていた。校則を緩くした結果、くずれる生徒が多くなった。現在は、現行犯主義でないとも何も言えない指導になっている。例えば、15年前であれば、現行犯でなくても、ベテランの教師が「くずれた生徒」に対する指導の論理と方法を知っていた。しかし、現在は、心情主義、許容主義、個を尊重する風潮のなかで、指導が困難になってきている。Aさんは、教育の荒廃の原因として「道徳教育」の軽視を指摘する。

たとえば、校則に関しては、東京の学校の上流家庭の子の親達の運動として、校則への批判が出てきた。それが、名古屋であれば、旭丘高校に「茶髪」の生徒が出てくるという形で影響が出た。しかし、旭丘の生徒は、「茶髪」でも、くずれない生徒が大半である。Aさん曰く、問題行動を起こすことは、その生育家庭と関わっているのに、その生徒達に対して、文部省の教育行政は対策を立てていない。今頃になって「家庭の教育力」の向上を訴えているが、その訴えは対策とはいえない。家庭環境と生育歴の中で「くずれていく生徒」がいることを正面から問題としていない。

B高校は「百貨店高校」を目指すという。進学補習もやり、簿記検定試験も受けさせる。また、異文化体験の一環として、アメリカに生徒を派遣するプログラム、さらに、アメリカ人の生徒を受け入れるホームステイなども行う。クラブ活動も活発に行わせる。Gオークと称して、38キロを歩く企画などを試みる。その地域の3つの学校が協力して、成績の良い生徒が、「ブランド」の名古屋市内の学校、あるいは、名古屋の自由度を求めて「流れてゆく」ことを避ける運動をしていると言う。進学新設高校としてG校に進学を促し、「底辺校」に属するH高校に「問題のある生徒」の受け入れを促していると言う。

Aさんの「管理職への道」のプロセスをまとめる。Aさんは「出世」をしようと教師になったのではなく、健康を考え「田舎教師」になろうとした。当時の政治的風潮の影響を受け、大学時代は左翼運動を活発にやった。その左翼運動の経験などから、赴任先の先輩教師たちを「馬鹿にした」Aさんであったが、面倒見のよい「熱血教師」でもあった。そして、組合活動が重要な位置を占めるが、一つの事件をきっかけに「組合への不信感」を持ち、組合離れ、その後「役職付き」で転勤したことが、管理職への1つのステップになった。そして、転勤先で与えられた役職を見事に果たした。その手腕が評価されると同時に、Aさんのなかで、生徒の授業での評価よりも、学校経営の「やりがい」が生まれた。その時に「有力校長」との偶然的な出会いがあり、その校長との関係で、教頭、校長と管理職になっていったのである。管理職になったAさんの目は、「田舎教師」を志した頃と同じように、生徒にある。その意味で、「教育志向管理職タイプ」と呼べるのではないか。組合への不信と生徒への興味、学校経営の手腕とそのことへの興味、さらに、「有力校長」との「出会い」こそが、今のAさんを管理職に導いたのであった。

2 「教育志向組合活動タイプ」のBさんの事例

Bさんの経歴と「重要できごと」の流れ

1939年 伝統のある軍人家庭の旧家に生まれる。父親は、教育界のボス的存在

- 小学校 5 年 「ナス売り」経験から、社会の矛盾を感じた。
- 中学校 2 年 「生徒を傷つける嫌な中学教師」の経験
- 18歳 第 1 志望大学失敗，教育大学に入学，「普通の大学」行きたいと思い 2 年後に退学
- 20歳 第 1 志望大学失敗，2 期校大学の人文学部で英文学専攻
「自然に」学生運動に参加，正義感に燃えていた。
リーダーでなく，アドバイザー的存在
- 25歳－31歳 名門高校に勤務，「親の七光りの人事」と言われる。
理想としての教職の夢が破れる。
「愚痴を言う会」で，組合づくり
クラブ活動指導，「自由な教室」作り
- 27歳 結婚相手に，「100パーセント管理職にならない」と宣言
- 31歳－46歳 地方の総合制高校に転勤
クラブ活動指導・進路指導への「妨害」
進学指導，「できない生徒」「商業科の生徒」に焦点
組合活動に意欲的でストライキに参加
- 47歳－53歳 「組合つぶし」の一環として「困難高校」に転勤させられる。
「厳しい授業」
教師冥利に尽きるさまざまな経験，生徒から慕われる。「できない生徒」の救い主として
- 54歳－現在 進学高校に転勤
受験中心の授業に不満
教師の中では，少数派として居心地が悪い。
自分のペースで教えることへの若い世代からの批判
「組合の仲間」を裏切らないために今も組合活動を続ける。

生徒と共に学ぶことを教師としての本分と見なしている B さんは，まさに，「教師のなかの教師」という印象であった。「できる生徒」には興味を示さず，「今まで勉強してなくて，努力不足でできない生徒」がいかに学んでいくかに興味があるという教師である。クラブ活動を 52 歳まで現役でやっていた。父親が，小中学校の教育界のボスであり，愛知県の教育長になりかけた人であった。しかし，それだけ「偉い」父親がいたので，教師にだけはなりたくないと思っていたと言う。父親は，教師としては尊敬できず「反面教師」としての役割しかなかったようであった。教師になっても，100パーセント管理職にはならないと決めていた。「権力には迎合しない」人物として生きたかっただと言う。組合活動を 30 年以上も続けて，ヒラの教師としてあとの 4 年間で勤めたいと言う。いまの 1 年生の担任を引き続いてやり，3 年間生徒を育てて，最後の 1 年はゆっくりしたいと言う。頑固に組合活動を続け，つねに，生徒に目を向けながら教育者として生きた B さんである。現在の進学高校の生徒を誉めると，「もっと目を輝かして学ぶ生徒になって欲しい」と言ったことが象徴的であるが，受験のために詰め込み勉強するのではなく，学ぶことに喜びを見いだして欲しいと考えているのである。どのようなプロセスで B さんのような教師の生

き方が形成されたのであろうか。

教師になるまでに：社会的矛盾を感じつつ、父親に反発して

「世の中の矛盾」を小学校5－6年生頃に実感し、それが、組合活動に向かわせた「原体験」ではないかと言う。その当時、大きな籠になすを一杯詰めて町の市場に持っていくと、値段が15円だと評価され、手数料として10円とられ、儲けとして5円しか稼ぐことができなかった。八百屋さんを覗いてみると、一山が15円で売られていた。この社会の矛盾に「子供ごろに非常に怒りを思った」原体験が忘れ得ないものとして、Bさんの心の深いところに残り、「精神形成の原点は…そこにあると僕は思っているんです」と言うほどに強烈にある。その体験がその後の学生運動、組合活動と一貫した生き方の基本になっているようである。だから、教師になって社会の矛盾について抗議する教師をめざしたと言う。

高校教師になったのは、教育界の「偉大な」父親に反発すると同時に、中学校の教師との「嫌な思い出」があった。受験で失敗して、合格できたのは小・中の教員養成大学であった。しかし、中学の時に出会った「恐ろしい教師」のようになりたくないと思い、その大学を2年間で中退した。中退して、入試に再挑戦したが、「希望の大学」には入学できず、地元をはなれた2期校大学人文学部に入学した。英語を勉強したいわけではなく、小説、文学そのものを勉強できたらと思って妥協して大学生活を送った。大学時代のBさんにとって重要な出来事は、学生運動であった。Bさんによれば、その当時は、学生運動は若い人の麻疹のようなものであり「自然な」ものであり、学生たちの多くが「正義感に燃えていた」時代だったので、ごく普通のことであったという。Bさんの運動への関わり方は、「リーダー」としてではなく、アイバイザー的な存在であった。Bさんは学生運動の闘士ではなく、デモに参加にし「社会問題」を考え、行動した学生であった。

就職の時期が来たときに、「コネ」だけは使いたくないと思い、一流企業に叔父さんが「コネ」で紹介してくれたのに対して、「頭を下げたくない」と思い、内緒で、高校教員の試験を受けたら合格した。

このように「回り道」の経歴を持ち、父親に反発しながらも、結局、高校教師として就職することになった。新任教師としての赴任先は、西三河地区では進学校として有名なD高校であった。Bさんは高校教育の世界に「夢」を持ち、「民主的世界」を期待して赴任した。

新任時代：名門進学高校の若手教師として（24歳から30歳まで）

新任教師として赴任した学校は伝統高校であり、教育に対して「夢」をもって教師生活を始めた。学生運動に参加していた時代に理想として描いた「民主的教育」を期待していたが、実際の学校教育現場は「ドロドロ」したものであり、「夢」は破れてしまったと言う。父親が教育界の「ボス」的存在であったことや、旧家の出身であることから、同僚からは、「お前さんは血筋がいいで、将来のエリートだからそのつもりで頑張れ…」と言われた。また、実際、周りを見てみると年配教師が多く、「新任でD高校にくるのは初めてだ」と言われるほどであった。そこに、多分、「父親の七光り」があったかもしれない。さらに、D高校は閥閥によって権力構造がはっきりしている学校であったようにBさんには

思えた。そこで、「権力には迎合したくない」と学生運動時代からの「想い」が強かったのであろうか、その権力に反発する形をとった。その一つのエピソード。D高校の年配の女性教員で、その娘と校長の息子が結婚している人物、つまり、D高校の「実力者」から、見合いの話があった。Bさんは、その見合い話を断った。その時付き合っていた女性がいたからか、と「権力に迎合したくない」というBさんの信念からであった。その「実力者」の態度が、その時以来豹変することになり、「さまざまな嫌がらせ」を受けることになった。

D高校は、その当時の高校としてはめずらしく組合が認知されていない「保守的」な学校であった。そこでの労働条件などに関して、「正しくない」と思える状況を見るにつけ組合への加入が必要だと考えた。たとえば、一つのエピソード。購買のおばあさんはアルバイトに過ぎないのに、D高校は彼女を夏休みに出勤させて、帳簿の整理をさせていた。そして、Bさんは、彼女は手当とか昼食という点で「不合理」な待遇に処されていたことを問題として感じた。

そこでBさんは組合の結成をもくろみ、その当時の若い事務員や常勤講師を集めて、「愚痴を言う会」を作り、よく集まって話し合った。そして、その後、教員のストライキが起こる昭和42年時まで継続される。Bさんとしては、給料は決して良くないのは覚悟していたけれど、教員の賃金が安すぎて、「落ち着いて教育やるためにも、こんな給与体系ではまずい」という気持ちがあり、組合活動の目的は給与体系の改善をめざすものであった。ストを決行するまでには、「涙を流した激論をやった人達も何人かいた」ほど、一種張り詰めた空気のなかで、組合活動に活発に参加していた。

権力に迎合せず、「民主教育」をしたいと願うBさんは、同僚からどのように思われようが、「生徒中心」の教師生活をするようになる。当時の教師生活の重要な側面として、クラブ活動があり、部活を通して生徒指導をすることであった。バレーにはまったくの素人であったが、「夜の2時-3時まで」コーチの本などを読み研究し、如何に、バレーを教えるか、技術を学ぶかを研究した。と同時に、高校の時の先輩が近くにおり、その人からバレーについて指導を受けた。

クラブ活動を指導してゆくことで問題になったのは、クラブと受験が両立するかということであった。Bさんとしては、高校生であるので、まず、「勉強が大事」という気持ちで、クラブ活動の指導をした。練習後、「だらだらせず、帰宅させ勉強させる」ような姿勢でのぞんでいたと言う。クラスのなかでは、生徒の自由を重んじ、47人全員で討議したクラス運営をしていた。個々の生徒の自由というよりは、「クラス全体の自由」を強調した。そして、それが成功して、「成績が全体として上がった」のだった。そのように、生徒を教育の中心に置き、生徒とともに学ぶことを心がけていたBさんに対して、他の同僚たちは、「赤教育を行っている」という批判を浴びせていた。その批判は、主に、管理職への「ごますり」の側近たちからあったと言う。その側近たちから「迫害された」教師生活というのが、D高校でのBさんの教師体験の特徴だと言う。その「迫害」の仕方は、若かったということもあるが、「担任はずし」によって、Bさんを生徒から切り離そうとするものであった。Bさんは、「担任をはずし」について、校長交渉までやったりもした。

D高校で担任を自由に持たせてくれなかったことに不満を持っていたBさんは転勤の希望を出していた。その時は、もっと自由に担任をもってやれる学校に行きたかった。担任を持ち始めてからは、転勤希望を出していなかったが、D高校での教師生活は、突然の

「人事異動」で終わる。2月頃に、生徒のスキー訓練のために志賀公園に行っていた時、校長から宿に電話があり、その人事異動について知らされた。異動先は、実際には3倍の時間は要したが、一応、通勤圏内であるので、それ自体では苦情を申し立てるのは難しかった。「苦情は通らないであろう」という見通しから、また、生徒を放って行事の最中に帰宅すると「同僚の先生や、生徒に迷惑をかける」ので、苦情の申し立てをしないことにしていた。組合の同僚の人たちが苦情を申し出てくれたが、実際、本人がいないと効果がないこともあり、苦情は認められなかった。そして、E高校に赴任することになった。

進学指導に個人的に熱心であったBさんは、E高校に転勤してからも、担任していた生徒から進路について相談を受けたりもした。D高校の進学の方針が、「名古屋大学にどれだけ合格させるか」であったので、生徒に名古屋大学を受験させる傾向があった。Bさんの相談の仕方は、生徒自身の希望がかなうような受験のしかたについてのアドバイスであった。Bさんは、受験には熱心であったが、あくまでも、「生徒の希望を実現する」ことが基本であった。次の赴任先であるE高校は、受験体制にはかわりないような総合制の高校であった。Bさんは、そこでは、「中より下の生徒」に対しての進路指導に情熱を燃やす教師であった。

中堅教師として：組合活動と進学・生徒指導 (31歳から46歳まで)

E高校でも、Bさんの教師生活は、組合活動、クラブ部活、そして、生徒の希望を考えた進学指導であった。E高校は、前任校のように進学高校でなかった。普通科、商業科、機械科を持つ総合制高校であった。「僕はとにかく勉強を、D高校の時もそうなんですが、特に、やっぱり、D高校に比べてギャップ大きいですね。で、やっぱり、この子達にも希望する大学に行けるように指導したい」と思っていたと言っている。Bさんは、レベルの低い生徒が努力をして、自分で実力をつけていく教育を目指したいと考えていた。実際は、商業科の生徒の中に、受験したくても「恥ずかしくて言えない」生徒が相談してきた時、「大丈夫だ」と言ったら、毎日の授業に真剣に取り組み出した例など笑顔で話すBさんであった。Bさんは「できない」と思われている生徒が成績を上げていったことに喜びを感じていた。成績が悪いのは、「それまでの努力の差」に過ぎないことを強調し、「底辺の子に自信を持たせる教育」を目指していた。しかし、「ごますり」管理職の側近たちは、「Bから生徒を離せ」という態度で臨んだ。「出世をめざす」教師たちは、Bさんが実績をあげるのに対して、批判的であった。自分達の実績だけを強調したかった。その結果、Bさんは、実績を出すごとに担任をはずされたり、3年生の担任をはずされたりという「いろんな陰謀」が図られ、「あいつに実績を持たせちゃいかん」という声が聞こえてくるぐらいであったと言う。その「出世志向」の人々に対して、Bさんは、批判的である。

「いやがらせ」は、クラブ活動でも見られた。クラブ活動の顧問を後輩教師に譲るように言われた。生徒の前で「喧嘩」する訳にいかず、「助手的」役割に徹した。バレー部の中で、2年生になっても「ボール拾いしかさせてもらえない」生徒が多くいたので、バレー部を2つに分けて、その生徒たちだけでチームを作った。バスの基本を教えるなど基礎を中心に教えた。そして、そのチームと後輩教師の「選手チーム」との試合する機会がおとずれた時、「選手の生徒たち」の気持ちを考え、「負ける方策」をとった。クラブ活動でも同じだが、Bさんの生徒指導の基本は、「底辺の子が自信を持てるようなふんいきにする

のが一番大事」だと考え指導した。生徒指導の基本について、「生徒が一番低い生徒も決して馬鹿にしないで。むしろ、俺はどうせ馬鹿だという子に対してね。……その子が勉強すればおもしろいなあって。やっぱり自分で歩きだすとね。わかってくるんですよね。そうなると勉強というのが楽しくなる。で、そこまでは、やっぱり、僕は強制力を働かすべきだと思うんです。……自分でやれるようになれば、まあ、後はね、時々、様子をうかがったりしてやったり、励ましてやればいいというのが、僕のまあ……信念みたいな気持ち」だとBさんは言う。クラブに受験に生徒の目線にあわせて教育を行っているBさんであった。

受験指導の一環としての補習については、「生徒からの信頼」と「親からの信頼」を勝ち取るためにやった。特に、父兄を敵にまわさないために補習をやっていた。組合の視点からすれば、受験体制そのものに批判的であるので、補習には反対であったが、現実にはやらざる得なかった。しかし、その親から特別に補習のための授業料を取ることは反対し、授業料を「返却」する形で補習を続けた。

この時代はまだ、「管理主義教育」の名残りがあったところで、「厳しいことは良いことだ」式で、生徒を厳しく指導していた。当時、福岡の体罰事件、岡山でも同じ事件があり、そのことが問題になっていたが、それでも、生徒指導で校則を厳しくする方向は変わっていなかった。具体的なエピソード。商業科の2年生の生徒が、小学生の女の子に「悪質でない」悪戯をやった。その生徒の担任であったBさんは、単純な動機だったので、厳しく反省させるだけで良いと判断したが、指導部の教師が入れ替わり立ち替わり家庭訪問をして、その生徒を自主退学させようとした。結局は、その生徒は留年して卒業したが、厳しい管理主義教育の指導があり、それに抵抗するのが困難であった。

そしてまた、突然の人事異動で、E高校から転勤することになる。これは、その当時の「保守派」グループの「組合つぶし」の一環としての人事であったとBさんは言う。もちろん、10年以上のものは優先的に転勤させられるというのは組合での同意事項であったが、その後の人事異動を見ているとそれが「組合つぶし」の一環であることがうかがえる。男性教師のなかで、校長の気に入らない5-6人が異動させられ、その翌年には、女性教師の5-6人が異動させられた。当時は、教育会³⁾が形成され、その「保守化」の力に組合が押されていた時代であった。このような「迫害」は組合活動をやっていなければ、起こらなかったであろうとBさんは言う。それだけ、組合が「どん底みたいに感じた」その時代に、活動が続けるのは困難なことであったと当時を振り返る。

困難高校に赴任して：「荒れる生徒」に慕われて（47歳から53歳まで）

「組合つぶし」の一環として、転勤させられたF高校は、「荒れた学校」であった。組合からの情報によると、特に、新2年生が荒れていた。その「荒れていた学年」の担任として赴任することになった。転勤する時には、担任の希望を取るが、第1希望として1年生の担任を申し出たが、教頭から「事情を察してください」との電話があり、結局、「荒れた学年」の担任となったが、その学年が荒れていた証拠として、「一人を除いて」すべての担任が入れ替わった学年であった。生徒たちに聞いてみると、「ぶん殴る先生が多かった」と言うし、教師たちに聞いてみると、「修学旅行に行きたくない」「隣りと話するだけでなく、勉強もしない」生徒たちであるということであった。

実際、試験をやってみると、30点未満の赤点をとる生徒が3分の2以上もいるほどのひどい状態であった。高校入試の「成績の平均」で言えば、前任校の入学者の内申点の平均が、5点満点で、2.7から4.4ぐらいまでの幅があったのに、F校では、ほとんどが、2.5から3.2の間にあり、「レベルが低く同質な」生徒しかいなかった。そのような生徒に対して、「勉強をしない限りは妥協をしない」という態度でのぞんだ。そして、「授業を真剣にやらなければ、そのまま、みんなが進級できなければしかたがない……」と生徒たちに言った。そのように言いながら、「内心では、本当にこのまま勉強せんで大勢が赤点のままいたら困ったなあ」と思いながら。実際は、3学期までには、赤点をとる生徒が、10人以内に減りその教育の効果が上がった。そのように厳しくやるBさんに対して、「組合なのに管理主義教育やっている」という批判もあった。しかし、Bさんによれば、「管理主義教育」と「民主教育」は全く異なったものであると言う。「民主教育」というのは「彼ら（生徒）を人間として大事にしながら、彼等がこう勉強を含めて自分達でこう考えて判断し、実行していけるようにしていく……あくまでも、生徒達を人間と見てゆくし、それから、人間として目の輝く生徒を……」育てるものだ、と。それに対して、「管理主義教育」は自分たちの手柄のために、生徒を非人間的扱いすること」であると言う。そのように成績が伸びた生徒たちはBさんのことを「神様みたいな扱い……」「僕と出会わなかったら、こんな学校いやな学校だなあ……」と生徒たちがBさんに言う程を慕ってくれたという。それこそ、Bさんにとって、「教師冥利に尽きた」経験であった。

F高校の生徒たちの特徴を「普通の子」だと言う。この生徒たちは、中学校では、上にはできる生徒がいて、また、下には、問題を起こす生徒がいて、この生徒たちは教師に相手してもらえなかった子どもたちであった。だから、心の中では、「勉強したい」と思っても、あるいは、「できれば大学へ行きたい」と思っても実際は、高校3年間でクーリング・ダウンのメカニズム⁴⁾として働き、1年次は「進学希望」2年次は、「できれば進学希望」そして、3年次には、「就職するあるいは、専門学校へ行く」という結果になるのである。先生から目をかけてもらってなかったので、「具体的な勉強の仕方を知らない」生徒が多かった。

F高校は困難校であるにも関わらず、この高校での体験は「いい体験」としてBさんの心に残っている。普通科が3クラスしかなく、「自分のカラー」が出せて効果のある教育ができた実感しているからである。Bさんの受験指導は、常に、基礎を徹底的にやることであった。教科書中心の授業をやり、「暗記するのではなく、自分で勉強する方法を、論理的に指導する」ことが目的であった。勉強をしていなかった生徒が勉強が面白くなる姿をみながら、Bさんは、教師としての喜びを見いだしていたのであった。

家庭の事情、「親の世話」を理由に転勤の希望を出した。希望地ではなかったが、母校に勤務することになり、現在3年目である。

進学高校に帰って：少数派教師として（54歳から56歳）

母校であるG高校は、この地域を代表する伝統校である。そこに転勤したことは、本来なら名誉なことであるが、Bさんは必ずしも、現在の職場に満足していない。その不満の一つは、受験体制を是認し、「教材の山」を生徒に与えるだけの受験指導にBさんの「受験で失敗した経験」から、反対している。自分の教育哲学に従い、マイペースで進むBさ

んであるが、他の教師からは「ペースが遅い」という批判が出る。「与えるだけの、暗記するだけの受験指導」に対して、Bさんは批判的である。例えば、3年生に対して、教師用のマニュアルを与え、生徒に解答を覚えさせて、授業に「書き込みのない問題集」をやらせるというやり方を取っているが、Bさんは「答え」を与える授業は、本来の授業ではないと言う。本来の授業は、予習して考えて、分かったところと分からないところを見極める力を養うことが重要である。他の先生が7課進むところを3課しか進まない授業をしながら、基礎を丁寧になってこそ実力はつくと言っているBさんは言う。

しかし、そのような教育哲学にたいして若い世代の教師から批判がある。「もう先生のような、その、職人的な進路指導の時代はもう終わりました」「B先生だからやれるんだ……」「先生の職人的技は、時代遅れ……」と若い世代の教師が言う。「現在は、コンピュータを駆使した進路指導が時代の流れである」と。そして、30半ばの教科主任などは、補習などのための問題集や参考書をわざわざ使い古したものを、Bさんに与えるなどの嫌がらせもやることもあると言う。

Bさんによれば、教師には3つのグループがいると言う。「自分の勉強を中心」にしている教師。その数はあまり多くない。他には、管理職に対して「ごまをする」多数の教師たち。そして、自分のような「生徒に目を向けている」極少数の教師。これが、G高校の現状であると。自分はあくまでも少数派である、と。「ごますり」教師だけが出世してゆくのが現状であると嘆く。管理職になりたくて、「お金」を積んだけれどだめだったと愚痴をいう教師もいると言う。

組合に入っていることには、メリットはないように思えるが、なぜ組合を止めないかを聞いてみた。それは、自分が信頼できるひとを裏切ることができないからだと言う。共に生きてきた「意味ある他人」の存在を強調する。そのなかでも、家族ぐるみでつき合っている3家族がいると言う。その彼等を今さら裏切ることができない。次に、自分を信頼して共に生きてきた子供や奥さんの期待を裏切りたくない。「正しいことは正しい」と自信を持って言いたい。「中学校の時代に悩んだことを忘れない教師でいたい」と思っていると言う。

教師として、現在の教育の問題点について語る。現在の教育の風潮は、「勉強さえできれば良い」「勉強できる子には甘い」教育を行っていると言う。それには、地域の教育力がなくなってきたという指摘もあるが、成績のいい子が自己中心的になり、それを教師側も容認しているのが問題であると言う。生徒には「正しいこと」と「悪いこと」の区別ができる能力が必要である。それは、現在のスポーツにも言える。エリート教育の問題点は、一部のできる子を切り離して教育をする問題である。もっと、視野を広げなければスポーツも強くならない。そして、クラブ活動でも、試合に勝つことだけを求めるのではなく、「共に学ぶ姿勢が大切である」という。特に、「学年の区別を学ぶ。同年の間の団結力ができて初めて全体の調和が保たれる」と言う。

「教育志向組合活動タイプ」としてBさんの経歴をまとめる。Bさんは一貫して、生徒に目を向けながら、「権力に迎合せず」自分の「信頼する人々」と共に教育活動をしてきた。そして、その時々の子供との交流こそが、Bさんにとって「教師冥利に尽きる」出来事の連続であった。まさに、「教師らしい教師」であった。組合活動は正義感から、仲間を裏切らないためにやっている。生徒たちのことを考えて、「基礎」をしっかりと身に付けさせ

る教育方法は、まさに、教育の神髄のように思える。「権力志向」で「実力のあった」父親を見て育った。家庭の重要な問題、母親に関する問題を、「忙しい」一言で片付け、逃げていた父親に対しては反発を持って生きた。誠実に信念に生き一貫に生徒に目を向け組合活動をやってきた教師である。

4 「教育志向管理職タイプ」Aさんと「教育志向組合活動タイプ」Bさんの比較

2人の教師がどのような「分かれ道」を進んだかを比較する。

まず、2人共に旧家の出身であり、大学へ行くことが当然とされた社会階層の出身という共通点を持つ。Aさんは「病弱」であったので、「田舎教師」を目指すつもりであったが、その「田舎の出身」であった故に「社研」に惹かれて、学生運動に興味を持ち活動した。それに対して、Bさんは子どもの頃からの「社会的矛盾」を感じ、「反面教師」としての「教育界のボス」の父親に反発して、学生運動に参加していった。同じコーホートであっても、「ノンポリ」学生⁵⁾はいたが、2人には、当時の「政治的時代精神」を受け入れて行動した共通点があった。しかし、活動の中で、Aさんは、「リーダー」的役割を果たしていたのに対して、Bさんは、「アドバイザー」的役割を果たしたという相違があった。

次に、高校教師になってからも、組合活動という政治活動をした点では共通であったが、Aさんは、リーダー・シップを取れた人物であったが故に、組合の権力の集中に対して不信感を抱く経験をしたのではないかと理解できる。それに対して、Bさんの場合、学校代表にはなるが、基本的には、日常的な活動が中心で「仲間とともに」活動するタイプであったので、「権力の集中」には関心がなかったように思える。

第3として、教育者として2人とも「生徒に目を向けた」教師であった。Aさんの場合、個人指導で受験の面倒を見るほどの熱心さは、新任時代からあった。そして、名門高校で教えた時に、「出来る生徒」を教える喜びを見出した。さらに、次の赴任先では「できる生徒」をさらに鍛えあげるシステムを作り上げ、大学受験で「結果を出す」教師であった。それに対して、Bさんの場合、「中より下の生徒」「勉強の仕方がわからない生徒」が「勉強するようになる」あるいは、「伸びてゆく」ところに教師としての喜びを見出した。そして、それは、あくまでもBさん個人の努力であり、生徒の成績をあげるシステムには興味なかった。

2人の教師は、人との出会い方で「分かれ道」を進むことになる。Aさんは、30歳半ばで既に、管理職への「実績」と「管理運営能力」を発揮していた。そして、重要なことは、「力のある校長」との出会いであり、「アメリカ海外研修」への参加であった。さらに、その時までには、学校全体、学校外との関係により「やりがい」を見出した。しかし、校長になってからの「まなざし」は、学校全体のこと、特に、「問題ある生徒」を含む教育を考える管理職になった。

Bさんの場合、「教育界のボス」の父親に反発し、組合活動を続けるだけでなく、結婚当時の27歳の時点で、「管理職への道」は自ら拒み、生徒と組合の「同僚達」に「まなざし」をむけながら、同時に、彼らから「まなざし」を受けながら、頑固に、正直に「正しい」教育者であろうとした教師としての生き方である。その意味で、「意味ある他人」がだれであったかが重要であった。

5 ま と め

「管理職志向」の道筋を歩んだ現校長のAさんと組合活動に従事し、ヒラの教師を続けているBさんの「分かれ道」について、それぞれのライフヒストリーを記述し分析した。比較して言えることは、出身階層、時代の政治的風潮の影響、受験体制への態度については、2人とも共通していた。しかし、1) 目をむけている生徒のレベル、Bさんは「できる生徒」に対して、Aさんは「中より下の生徒」、2) 「意味ある他人」との出会い方とその人々との関係性、Aさんの関係は「利害関係を含む」社会的関係であり、Bさんの場合、全人格的で情緒的な「仲間意識」であった。3) パーソナリティーと呼べる違い、学生運動・組合運動において、Aさんは、「リーダー的」であり、Bさんは「アドバイザー的」であった。4) 組合への態度、Aさんは、ある時期から批判的であり、Bさんの場合は、精神支えとしてある。以上4点において2人に「分かれ道」があったと思われる。さらに、人事異動での勤務高校の経験は重要である。それぞれの学校文化、教師文化は、学校により異なる。異なった学校文化、教師文化において、教師の「存在証明」の仕方も異なると考えられる。進学高校では、「進学でどれだけ成果を出すか」「受験にどれだけ役立つか」を演じて自己の存在証明する傾向があるが、「困難校」「底辺校」では、生徒の生活指導上の問題をどれだけ処理できるかで自己の存在証明をする必要がある。その意味で、人事異動、すなわち、どのようなタイプの学校を経験しているかは、どのような教師経験するかにとって、重要な要素と考えられる。

最後に、このようなライフヒストリーによる事例研究は、教師のタイプを単に「静的な類型」に分けるのではなく、ライフヒストリーの具体的に変化してゆくプロセスを事例的に記述することにより、具体的な教育環境における「等身大」の教師理解につながるのではないと思われる。この小論においては、「管理職志向」と「組合活動志向」の分類の一つの基軸のみに焦点を当て、それぞれのライフヒストリーに従い、事例的に示すことを試みたにすぎない。次回の論文では、「生徒教育志向」と「専門学習志向」の分類基軸について論ずる予定である。この2つの基軸により、多様な高校教師の仮説的類型的理解が可能であろう。

注

- 1) 本研究は文部省科学研究費補助成一般研究(B) (1995-1996年) として助成を受けた「教師文化からみた受験体制の社会学的研究」を題する調査研究の成果の一部である。その課題として研究成果報告書を1997年3月末までにまとめる予定である。その報告書には紙面上の制約はないので、聞き取りした全員のライフヒストリーを本人の「生の声」を中心に編集する形でまとめる予定である。
- 2) 1967年に設置された県教育委員会の諮問機関の愛知県高等学校研究協議会を中心に大学区制の矛盾を解消する目的で「愛知方式」と呼ばれる学校群制度が1973年に導入された。その特徴は、1) 大学区制を温存していること、2) 名古屋市などに複合学校群を一部に採用したこと、3) 普通高校に一部(66校中24校)にのみ学校群制度が採用されたことであった。(愛知公立高等学校教職員組合 1995: 6-7)

- 3) 日本教育会は1975年に発足した。愛知県では1981年2月中旬に、愛高教の抗議行動の中で結成された。当時、組合率40パーセントの愛高教は、左派組合といわれ、それに対抗する形で高校を中心に別組織として作られた。県支部規約には、賃金、定員、労働条件改善などの「事業」も含まれていて、労働組合的な色彩が強いが、所謂、第二組合であった。1968年頃まで、愛高教が数回のストライキ闘争をやったが、その中の反対派が形成され、教育会の中心メンバーである。（鎌田：1986：72～73）
- 4) 日本の高校の階層の下位に位置する学校では、生徒は最初、大学受験の希望を持ち、野心的計画を持つが、現実の模擬テストなどの考慮して、3年間のうちには自分の野心を冷却してゆく（クーリング・ダウンさせる）メカニズムを持つ。高校の学校間格差は一般的に、このメカニズムを果たしていると考えられる。
- 5) 聞き取り調査をやった同世代に限定してみると、何らかの形で学生運動に関った人は8名中3名で、あとの5名は政治にはまったく関心がなかった「ノンポリ」であったと言っている。しかし、ほとんど全員が教師になってから、何らかの形で組合活動に参加した。

参 考 文 献

- 愛知公立高等学校教職員組合，1995，『愛知県の高校入試制度』
- 鎌田 慧，1986，『教育工場の子どもたち』講談社文庫
- 『教育社会学研究』1990，特集 ライフコースと教育，第46集，5－124頁
- 門脇厚司，1990，「教育社会学におけるライフコース研究の可能性」『教育社会学研究』第46集，17－33頁
- 山崎準二，1993，「教師のライフコース研究」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第43号，179－192頁
- 山崎準二，1994，「教師のライフコースと成長」稲垣忠彦，久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会，223－247頁